

落ちた天使

2009.06.19

ある日、とつぜん。

天使 トニーは、雲の隙間から、落っこちました。

なぜって？

翼を失ってしまったから。

翼は 天使のトレードマークともいえる、大切なもの。

翼があるからこそ 天使である、と 言っても、
過言では ありません。

少なくとも、下界では、そう思われていたようでした。

だって。

翼を失った天使が、
道端の 大きな榎の木の下に、力なく 座り込んでいようとも。

無垢なオーラ全開で
「いかにも」というような天使風の衣服を
身にまとっていようとも。

彼を見て、「天使だ！」と 叫ぶ者は、
誰も いなかったからです。

それどころか、
彼を 振り返って見る者さえ、ありませんでした。

もちろん、みんなが 天使の存在を信じているわけではない、
という 理由も、あるでしょう。

が、トニーは、どうにも 寂しい気持ちで いっぱいでした。

彼は、いままで、
天使としての職務を 十分に 果たしてきたつもりでした。

天使という 華やかなイメージとは 裏腹に、
彼らの仕事は、地味な裏方がメインです。

大天使ともなれば、話は 別だけど、
その他大勢に過ぎない、トニーのような 一般天使たちの仕事は、
目立たないものが ほとんどでした。

けれども、トニーは、天使としての仕事に 誇りを持ち、
陰ながら、なんの見返りも期待せずに
みんなの手助けをしてきました。

天使でありながらも、身を粉にして働いてきました。

それなのに。

下界に落ちてしまった天使は、誰にも注目されることはなく、
その存在に気づいてもらうことすら、ない。

だからといって、誰を恨むわけでもないけれど、
そんな現実を前にして、漠然とした寂しさは、残ります。

そうか。

僕は、寂しかったんだ…

トニーは、つぶやきました。

いままで 誰かのお願いごとのために 立ち働くことに 没頭しすぎて、
自分の中を のぞきこんでみる余裕も なかったようです。

そうか。

僕は、寂しかったんだ…

同じ言葉を もういちど 繰り返してみると、
その 寂しさという名の 薄い色のカタマリは、彼の中で、
すーっと ほどけていきました。

トニーは、この ミントのような清涼感を ほんの少し 味わった後、
大きく 伸びを しました。

とつぜん 下界へ落ちてしまって、
これから どうしたらいいんだろう。

しばらく 途方にくれていた彼は、
檜の木の葉っぱが すりあう音を 耳にしているうちに、
ふと、おもしろいことを 思いつきました。

いままで 僕は、誰かを助けてばかりだったけど、
ここで、天使さまに お願いごとをしてみたら、どうなるんだろう？

天使が 天使にお願いごとをする、なんて、
聞いたこともありません。

が、とりあえず トニーは、みんなが よくやるように、
胸の前で 両手の指を組み合わせ、目を閉じて、神妙な顔で
お願いごとをしてみることにしました。

天使さま。
天使さま。
お願いします。

僕に…

天使さま。
天使さま。
お願いします。

僕を…

トニーは、考えこみました。

僕に、○○を お与えください。
僕を、○○○に してください。

みんな、お願いごとをするときは、そんなふうに 言っていました。

が、トニーは、
自分が、いま、なにも 望んでいないことに、気づいたのです。

僕は、なにを したいんだろう？
僕は、なにが 欲しいんだろう？

自分に 問いかけてみましたが、
思いつくことは、ありませんでした。

彼の中は、空っぽのままでした。

おかしいことに、天使トニーは、
なんとしてでも 元の場所に戻りたい、とは
思っていませんでした。

いますぐ 雲の上に戻してあげよう、と
誰かが 言ったのならば、
喜んで、そうしてもらおうでしょう。

おまえの翼を 元通りにしてあげよう、と
誰かが 計らってくれたなら、
それは、とても 嬉しいことでしょう。

けれども、なにがなんでも そうしたい、
というわけでは、ありません。

こうでなくては！ というものも、ありませんでした。

トニーは、
いま、自分が なにも 望んでいないことに、気づいたのです。

そして、いま、自分に なにかが 不足している…
という感じが まったくしていない、
ということにも。

大事な翼を失ってしまったことさえも、
いまのトニーには 問題では ありませんでした。

翼があろうと、なかろうと。
自分が天使であることに、変わりはないから。

自分が 天使に見えようと、見えまいと。
自分が 自分であることに、間違いはないから。

トニーは、そっと 立ち上がりました。

雲の上では、便宜上、飛んでばかりいましたから、
自分の足で 歩くのは、久しぶりです。

が、体重が かかることで 自分の身体を意識する この感覚は、
なんだか 懐かしく、心地よいものでした。

2本の足を通して、
大地の育んだ豊かさが じんじんと 全身に伝わってきています。

自分が 自分であることを、楽しみなさい。
いま、ここに在ることを、この瞬間を、
楽しみなさい。

温かく確かな 大地の波動は、
トニーの細い足に、そう 語りかけているかのように
感じられました。

翼を失った天使は、
空を飛ぶ代わりに、2本の足で、ゆっくりと 歩き始めました。

はじめは ぎこちなく。
それでも、しっかりと、大地を 踏みしめながら。

夕陽とともに ゆっくりと遠ざかっていく トニーの後ろ姿を見送った
櫨の木は、目を丸くしました。

自分の足で 歩き始めた、天使の背中には…

白い翼が、ふたたび 姿を あらわしていて、
まさに いま、大きく 羽ばたこうとしているところでした。

